

千曲川（長野県）

関戸万智

私の実家である長野県坂城町には、日本一長い川として有名な信濃川に続く千曲川という川が流れている。私の生まれ育った坂城町はこの千曲川をはさんで発展してきた。夏になると鮎釣りがさかんに行われ、一世代前には筏降りも一つの名物であった。六ヶ郷用水によって取り込まれた千曲川の水は流域の水田を潤し、この町の発展、またそこに住む人々の生活をも潤わせてきた。実家を離れて早五年、この場所に帰ってくるといつも私を迎えてくれる千曲川がある。朝にはさむさゆえに靄が立ち、昼間の



よく晴れた日には水面がキラキラ輝いてゆっくりと流れている。雪や雨の降る日はグッと水量がふえ、土色に濁った水がゴォゴォと音を立てて流れていく。季節の変わり目や、天気の流れにしっかり反応している素直な川千曲川だ。今ではその川にコンクリートがゴツゴツと見えるのが少し残念だが、昔となんら変わっていないようなそんな気がする。ひとたび洪水となれば、地域に甚大な被害をもたらす千曲川だが、平時におけるその表情は極めてやさしく、おだやかで、地域の人々の、やすらぎの源である。

小さな頃から川遊びが大好きで、よく兄弟三人長靴をはいて千曲川に続く小さな川の辺で、フナを取ったり、鯉を釣ったり、アヒルを追いかけたりしていた事をおもいだす。あの頃はこの川をさかのぼって行ったらどこに行き着くのか？ということが私たち兄弟三人にとって川に関する最大の謎であり、その謎を解くべく、三人で網を片手に川を逆流していった事もあった。川は私の遊び場であったし、自然を最も近く感じることでできる最高の場所であった。しかし、私とこの川の思い出は楽しい記憶ばかりではない。中学生の頃生徒会の企画でやった川辺のゴミ拾いでは、川や河原の汚さに落胆し、この川を汚しているのが自分達自身であるのだと自覚した時の罪悪感は、今も忘れることのできないものである。また、この川によってどれだけの人の命が奪われてきたのかと考えるとき、千曲川に対する私の楽しい記憶とは相反する感情がうまれてくるのだ。嵐の日にはものすごい勢いで流れる千曲川。その中に飲み込まれた人をおもいながら見るニュースは自分がその川のことをよく知っているからこそ辛いものであった。さらに、昨年の大豪雨では水嵩が堤防まで上がり、その付近の道路や家を水浸しにした。この地域の人々はこの川に助けられつつ、時には戦わなければならないときもあるのだということを感じずにはいられない事実であった。

昔からこの辺りに住んでいる母、祖父、大祖父にとっての千曲川とはどんな存在であったのだろうか。大祖父が若い頃というのだから多分80年前位

の話であろう。そのときは網一つで千曲川を泳ぐ魚を捕まえることができたそう
うだ。きっと魚が見えるくらい水が澄んでおり、今では考えられないくらいた
くさんの魚達が生息していたのであろう。それから少しした祖父の時代。お
およそ50年前位には皆がこぞって水泳をしに千曲川に行ったそうだ。当時はプ
ールなどもなく、夏の暑い日は千曲川に行って泳ぎ、友達と橋の上から飛び降
りたりして遊んだことが彼にとっての千曲川の思い出である。そして母の時代。
30年位前はもう水泳をすると珍しがられたそうだ。そのかわり子供たちはよ
くめだかを取りに川に出かけ、たくさんの稚魚たちを追いかけまわしていたよ
うだ。このように、千曲川の存在もその時代と共にながれているのだと感じた。
私も小さな頃はよく川であそんだものだったが、今では川で遊ぶ子供たちを見
ることはない。最近近所の子が父親と川遊びをしていたと母に聞いたがそんな
光景もいまや珍しいものとなってしまったようだ。

記上にも述べたとおり、千曲川は日本一長い川、信濃川に続く川として
知られている。そんな千曲川について Web-site をもとに調べてみた。まず信濃
川は新潟県域のみの呼び方であり、長野県に入ると千曲川と名称が変わる。信
濃川全長367kmのうち、信濃川と呼ばれている部分が153kmなのに対し、
千曲川と呼ばれている部分は214kmと千曲川の方が長い。しかし、河川法上
では千曲川を含めた信濃川水系の本流を信濃川と規定しているため、全体で信濃
川と呼ばれ、信濃川が日本で一番長い川となっている。歴史をたどると、千曲
川の流域には先石器時代から中世に至るまで、遺跡が多く出土する。最も古い
時代で5万年前のものと推定され、このような大昔から、人々は千曲川とその
周囲の豊かな自然から恵みを受けて暮らしてきたようだ。そしてさらに、千曲
川は古くは万葉の頃から多くの詩歌に歌われ、日本人の郷愁を誘う原風景を伴
う川としても知られているのである。現在千曲川は各市営水道の原水であると
ともに、長野県営水道の原水ともなっており、また豊かな水産資源をもつ川とし
て知られ人々の生活、工業や地域の発達におおいに貢献してきた。しかし、千
曲川は流れている水はきれいだが、川底は腐っているといわれる事実もある。た
しかに千曲川はBODが示す水質については著しい汚濁のない清流であるが、川底
の環境まで含めて総合的に河川環境をみれば、決して清流とはいえない。その元
になる原因を解き明かし、対策を考えることが、これからの千曲川の環境保全の
重要な課題の一つである。

私はこの千曲川が人々とともに生きる川であってほしいと願っている。
いや、千曲川がではなく、人々が千曲川とともに生きる人間であってほしいと
願う。この川はいつも私たち人間とともにあった。私の生まれる何億年も前か
らこの地球の事を見、環境の変化を感じ、人々の生活をも知っているのである。
時には食べ物をあたえ、飲み水を与え、また遊び相手になってくれる優しい川、
その川が今私たちに訴えている事はなんだろう。その水、流れ、石、砂、すべ
てをつかって私たちに訴えようとしている事は、きつともっと私を、千曲川を
知ってくれというメッセージではないだろうか。私たちは川に頼り、いつしか
その存在が当たり前になってしまっていないだろうか。水があつて当たり前、
魚がいてあたりまえ。そうやって川に甘え、無関心になっていくその無知が私
たちの千曲川をかえ、環境を破壊し、地球をもこわしていつているように思え

てならない。川が、緑が、また自然が私たちを知り、見守り、あたえてきてくれたように、私たちも目の前にある自然たちを知り、見、そのものために何かしなくてはならないのだろう。それが本来この世界が造られ、人間と自然とが共存していくためにつくられたルールであると私は考えるのである。

参考 Web-site

<http://edu.umic.jp/zukan/work/suishitsu/suishitsu-07.htm>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

http://www.mlit.go.jp/river/jiten/nihon_kawa/84035/84035-3.html

